

## 第 2 2 回 酉の市に見る江戸の発展と町人のお祭り

### 1 11 月の風物詩酉の市

東京において 11 月の風物詩として、「酉の市」があります。実は、関西の方にはあまりなじみがないかもしれませんが、まず今回は関東の風習から先に書かせていただき、関西の風習は後に書きます。

関東では、酉の市とって「商売繁盛」のお祭りをしています。

酉の市は、関東地方に多く所在する おおとりじんじや 鷲神社の年中行事として行われており、多くの露店で、威勢よく手締めして「縁起熊手」を売るというのがその祭りの内容になります。

鷲神社は、やまとたけるのみこと 日本武尊を祀り、武運長久、商売繁盛の神として有名です。

神社に伝わるところによれば、そもそもは天照大御神が天之岩戸にお隠れになり、あまのうずめのみこと 天宇受売命が岩戸の前で舞われたときに、弦という楽器を司った神様がおられ、あまのたちからおのみこと 天手力男命が天之岩戸をお開きになった時、その弦の先に鷲がとまったのです。天岩戸の前に集まった神様達は、世を明るくする瑞象を現した鳥だとお喜びになり、以後、この神様は鷲の一字を入れて おおとりだいみょうじん 鷲大明神、あめのひわしのみこと 天日鷲命と称される様になったのです。その後、あめのほひのみこと 天穗日命が東国を経営するために東国経営の拠点である武蔵の国に到着し、そのお供として連れた出雲族 27 人の部族と、武蔵野の地元の部族の鎮守として、おおなむちのみこと 大己貴命を祀り、天照大御神の天岩戸の瑞象から、関東の鷲神社としたのがはじめとされています。この内容は正史には書かれていないのですが、神社には古くから伝えられている内容なのです。

天日鷲命は、諸国の土地を開き、開運、殖産、商売繁昌に御神徳の高い神様としてこの地にお祀りされたのです。その後、日本武尊が東夷征討の際、社に立ち寄り戦勝を祈願され、志を遂げての帰途、社前の松に武具の「熊手」をかけて勝ち戦を祝い、お礼参りをされました。その日が 11 月酉の日であったので、この日を鷲神社例祭日と定めたのが酉の祭、「酉の市」となったとされています。そして、この故事にちなんで、鷲神社の御祭神として日本武尊を加え、現在に至っているのです。では、酉の市の由来はどうなっているのでしょうか。

酉の市は、江戸時代くらいに始まった風習で、そんなに古くありません。そのために神道の解説と仏教の解説の二通りあります。

神道の解説では、大酉祭の日に立った いち 市を、酉の市の起源であるとしています。全国にある神社のお祭りには必ず市が立ちます。現在では「縁日」といわれますが、昔はものが集まり市となって賑わったのです。鷲神社の祭神である日本武尊が、東征の戦勝祈願を鷲宮神社

で行い、祝勝を花畑の大鷲神社の地で行います。昔の人は、祈願をし、その成果があると必ず「御礼」として、その神社でお祭りを行いました。日本武尊が行った戦勝祝いのお祭りがその起源であるとされているのです。そのお祭りを行ったのが先にも述べた11月の酉の日であり、熊手を縁起物として扱うのです。また、日本武尊が亡くなったのが、11月の酉の日で、その日に合わせてお祭りをしているとも言われています。それは、日本武尊が大和に帰り着く前に亡くなってしまうのですが、その時に大和の国に帰るため、白鳥になって飛んで行ったとする「白鳥伝説」にちなんでいっているとされています。いずれにせよ日本武尊と「鳥」は、非常に深い縁があるとされていて、その縁にちなんで酉の市を行うとされているのです。

一方、仏教の解説では、鷲妙見大菩薩わしみょうけんたいぼさつの開帳日に立った市が酉の市の起源とされています。文永2年(1265年)11月の酉の日、日蓮宗の宗祖・日蓮上人が、上総国鷲巢わしのすの小早川家(現・大本山鷲山寺)に滞在した時に、その場で国家平穏を祈ったところ、明星が明るく輝きだし、鷲妙見大菩薩が現れ出たと伝えられています。これにちなみ、浅草の長国寺では、創建以来、11月の酉の日に鷲山寺から鷲妙見大菩薩の出開帳が行われました。その後11月の酉の日に鷲妙見大菩薩が開帳されることになったのです。

実際のところは、鷲神社の近隣農民の収穫祭が発端ではないかといわれています。しかし、農民の祭りであったために、祭りに賭場が開くようになり、取り締まりが厳しくなって、徐々に衰退します。その代わりに、鷲神社でのこれらのお祭りを併合して行うようになったのです。

浅草は江戸時代、近隣に吉原の遊郭があり、非常ににぎわっていました。このために、浅草の鷲神社の酉の市は商売繁盛のお祭りとして、非常に盛り上がった祭りとなり、いつしかその鷲神社、大鳥神社が同様の「酉の市」を行うようになったというのが真実のようです。

## 2 酉の市はなぜ11月に開かれるのか

では、なぜ11月に行われるのでしょうか。

由来としては、日本武尊の戦勝祝いを行った時、または日本武尊が亡くなった時を記念して11月とされています。もちろんこれも理由の一つでしょう。しかし、11月であるというのは、ほかにも理由があるようです。

昔はお芝居などの伝統文化における一年の始まりは11月だったのです。東京歌舞伎座の顔見世は11月に行われるのが恒例になっています。しかし、関西では顔見世は12月ですね。京都南座の顔見世興行は、12月に行われます。

このほかにも日本の伝統文化や芸事の一年の始まりは11月または12月であったとされています。様々な理由が言われていますが、1月からにしてしまうと、一般の正月と重なって、なかなか人が集まらないということが一つの理由とされています。芸事というのは、人々が暇になった時に行うものです。そのために、収穫が終わり、収穫祭である秋祭りが終

わった時が、最も芸事など農業とは関係のないことが盛んになる時期なのです。そのために、関東では11月に芸事などの1年が始まるのです。

関西、特に京都では、11月は新嘗祭など公式の行事が少なくありません。そのために関東とは異なり、1か月後ろの12月になるとされています。もちろんほかの説もありますが、芸事の1年の始まりが11月または12月であり、その時に、農業と関係のない「商売繁盛」のお祭りである「酉の市」が関東で行われるということになるのです。特に、浅草の鷲神社などは遊郭などのお祭りになり、そのために非常に人が集まったといいますが、しかし、吉原の遊郭こそ、農業とは関係がなく、なおかつ、芸事と商売の街ということが言えます。当然に、芸事や商売ですから11月が最も大きなお祭りになったのです。

### 春を待つ 事のはじめや 酉の市

この句は、松尾芭蕉の弟子である其角が詠んだ句です。

この句でもわかるように、11月というのは「春を待つ」ということと同時に「事のはじめ」ということが言われています。江戸時代には、11月に新しいことをはじめ、新年になってそれを徐々に芸事として極めてゆくようになるのです。

「春を待つ」という、冬で作業も何もない時に、室内でできる芸事を新たに始める。そのきっかけとして、酉の市でお祭りをする時期が重なるということになっています。酉の市では様々な人が集まり、収穫祭りではなく、徐々に芸事の祭り、商売の祭り、そして、まさに江戸の町の祭りとして親しまれたところで、様々な大道芸、小唄や三味線など、あるいは落とし噺なども行われていったのです。それらを酉の市で見て知り、新しいことを始めた人が少なくなかったのではないのでしょうか。冬に向けて、今年こそ、と思って酉の市に参加する、そんな江戸っ子の気質が良くわかる俳句ではないかといわれています。

特に江戸の街では、花又の鷲大明神を「本の酉」とか「大酉」（現在の足立区花畑の大鷲神社）と呼び、千住にある勝専寺の鷲大明神を「中の酉」（現在の足立区千住の勝専寺）、そして浅草長國寺の鷲大明神は「新の酉」（台東区千束の長國寺と鷲神社）と言われました。この三ヶ所で開かれた酉の市がことに賑わったと伝えられています。ちょうど千住大橋を渡って綾瀬川に沿って歩くと、真っすぐ一本の道になる、この三つの酉の市がとくに有名であったといわれています。あるいは、江戸時代は船の運航が盛んでしたから、船による三つの酉の市を巡る旅のようなものもあったかもしれませんね。

天保9年(1838)に上梓された『東都歳事記』の一節をご紹介します。

「下谷田んぼ鷲大明神社は長國寺が別当を務め、世俗新鳥という。今日開帳あり、近年参詣群集する事はなほだしく、この社が賑わうようになったのは、今(天保3年1832)から50年ほど前のことで、栗餅芋頭いもがしらを商うことは葛西花又と変わらないが、熊手は一段と大きくなっている。以前は青竹ちやせんの茶筌ちやせんも売っていたという」

また、広重の描いた江戸のガイドブックとも言える『絵本江戸土産』（第六編）には「浅

草酉の町」と題して浅草田んぼから眺めた酉の市が紹介されています。そこには田んぼの中を驚大明神に参詣する群衆を描いた絵とともに、「浅草大音寺前に在り日蓮宗長國寺に安置したまふ驚大明神と世にはいへど 実は破軍星を祀りしなりとぞ、十一月の酉の日には参詣の諸人群衆なし、熊手と唐の芋をひさぐを当社の例いとす。」との文章が添えられています。様々なところに浅草の酉の市に関しては書かれており、非常ににぎわっていたことがわかります。

### 3 酉の市と吉原の通り抜け

先ほどから、「吉原」が出てきます。言わずと知れた「遊郭」です。酉の市が遊郭と非常に縁が深かったというのは、昔の川柳に描かれています。その中で有名なものを上げてみましょう。

お多福に熊手の客がひっかかり  
熊手見て女房かみつく戌の市

お酉さまに出かけて行って、熊手を買ったまではいいですが、熊手は広げた歯で、様々なものをひっかけてしまいます。浅草のお酉さまに出かけ、その横にある吉原でつつい遊んでしまい、そのまま翌日、要するに「戌の日」に朝帰りして、女房に噛みつかれるというような、そんな川柳が詠まれていたのです。逆に言えば、酉の市は、吉原にとっても「特別な日」でしたし、新顔の「顔見世」が行われるときだったのです。そのために、普段はお大臣様しか遊べない敷居の高い吉原も、この日は一般の庶民にも開放されたというような事情もあって、吉原は特別ににぎわったようです。

実は、吉原と浅草は、浅草寺の北の田んぼを挟んで隣同士にあります。吉原郭内は、その周囲を「お歯黒ドブ」と呼ばれた大堀で囲まれていました。日頃の郭内への出入りは唯一大門が使われ、火事などの非常時にだけこの堀にはね橋を掛けて出入りしたのです。

大門は浅草寺とは反対の方向にあったので、目と鼻の先にあったにもかかわらず、大回りをしないと吉原に行くことはできませんでした。次第に、酉の市くらいは跳ね橋をかけ、ほかの門も開けるようにとの要望が大きくなり、いつの頃からか、酉の市の時に吉原の通り抜けを行うようになったのです。天保の末（1843年頃）刊行された『柳花通誌』によれば、「西河岸の門開きて見物はなはだし、常には一方口にて通り抜けならず。」また、「昔は遊女残らず参詣させて、この里の物日とせし事郭の記にありという。郭中の賑わい常にことなれり。」とあります。このころは、花魁道中などが酉の市見物をするにあたって、大門から遠回りできないということがあり、西河岸の門を開いたようですね。花魁は吉原では最も階級が高く、場合によっては大名家の若君や大店の店主などをスポンサーに持っていたため、そのわがままが聞き入れられたのではないのでしょうか。

明治30年発行の風俗画報にも「酉の市の日には吉原遊廓の諸門を開き、遊女を参詣せしめ客を引く手段をなすことなり。さてもさても商売には抜け目なきものかな。」との記事が見えます。その風習は、明治30年になっても、同じようになっていたようです。

樋口一葉は、この吉原のすぐ近所に住んでいました。酉の日の郭内への出入りについて、『たけくらべ』では「……大鳥神社の賑わいすさまじく、ここをかこつげに検査場の門より乱れ入る若者……角町京町所々のはね橋より……」「美登利さんは……揚屋町のはね橋から入って行った……」と述べ、このはね橋わきにある番小屋の番人の子供をも子細に描写しています。

なお、吉原の遊郭は昭和33年4月1日に売春防止法によって廃止されるまで遊郭として存在していました。要するに昭和の中期までは、ここに紹介したような「吉原」の風景があったのですが、やはり辻賭場と同じように、法律と取締りによってその風流はなくなってしまいました。もちろん、その良し悪しは別問題です。

#### 4 酉の市の熊手

酉の市でもう一つ大きな風物が「熊手」です。

縁起物であることから、吉原では「熊手かんざし」なるものが存在したようです。熊手の形をしたかんざしを格子戸から出し引きして、お互いの気を引いているというような風習が酉の市ではあったようで、忙しかきいれ時の吉原においては新しい顧客をつかむ大きなチャンスだったのかもしれない。

その熊手ですが、なぜ「熊手」なのでしょう。

神社の縁起によれば、日本武尊の武器が熊手であったということですが、これはさすがに無理があるかもしれません。日本武尊の武器といえば、当然に「草薙の剣」が有名ですが、彼はそのほかにもさまざまな武器を持って、東征を行っています。しかし、その中に熊手で戦ったという記述を見つけるのはなかなか難しいようです。

では、熊手はどのような意味があるのでしょうか。一般に言われているのは、熊手で、運や福や幸運、場合によってはお金や商機を「かき集める」という意味があるようです。実際の酉の市が鷲神社での「収穫祭」であるということから、落ち葉などを「掃き込む、かき込む熊手」が縁起物とされたようです。

しかし、酉の市の由来にも複数あるように、熊手が縁起物であるという由来も複数存在します。

そのうちの一つは「酉」にまつわるというものです。酉の市が開かれるのが鷲神社であることから、鷲がしっかりと獲物を捕らえて放さないことになぞらえて、「幸運をわしづかみにして放さない」ということが縁というようになったのです。鷲の爪に似せて、鷲の4本ツメのうち3本を熊手の手に、1本を柄とした3本ツメの熊手が後に5本ツメになり、「運をかつこむ」熊手守りになったと言われます。鷲神社だから、鷲の爪に似せた「熊手」とい

うのもなかなか説得力のある由来です。現在に伝わる多くの熊手は、熊手の手の中に様々な幸運が「捕まれて」います。お多福や米俵、花など様々な縁起の良いものを「わしづかみ」にしている、そのような形の熊手が売られているのは、この由来の延長なのかもしれませんね。

一方、日本武尊の戦勝祈願ということから、軍扇に似せたものとして熊手が使われたという由来もあります。昔、戦場に赴く武将が神仏に戦勝を祈願する際に軍扇や刀などを奉納しました。戦勝祈願でそのようなものを奉納するのは至極当たり前でしたし、また、軍扇を使うようになったのは、軍の指揮をするという意味で行っていたので、昔の「軍師の学校」である足利学校がある坂東の土地の方が軍扇などの普及は高かったようです。そして、めでたく勝ち戦にて帰陣した際には、軍扇は何回も戦場で振られているので、熊手のように反り返った骨だけになっていたことから、その故事にあやかって「開運を招く」熊手守りになったといわれているのです。大田道灌など、優れた軍略家を多く輩出した関東ならではの由来ですね。

熊手というものはこのように、酉の市の由来から考えて様々な由来があります。しかし、徐々に酉の市が浅草の「都会のお祭り」となったところで、様々な物が出てきます。現在も観光地に、新たなお土産や名物が生まれてくるのと同じように、江戸市中からの参拝者が増えるに従い、実用性より洒落っ気を加えた縁起物へと変化していったようで、様々な縁起物の商品ができてきたようです。例えば、大きな唐の芋「頭の芋」、粟で作った黄金色の「黄金餅」が、酉の市では縁起物として買われてきたようです。

明和8年(1771)頃から盛んになった浅草長國寺の酉の市では、花又で商われる熊手よりずっと大きく華やかな縁起熊手が出現し、後にはかんざし熊手など多種多様の熊手が人気となります。その華やかな縁起熊手が、現在に伝わっているのではないのでしょうか。

熊手を買う時の気合の入った掛け声などは、昔の活気を思い起こさせるものですね。

## 5 商売の神様の関東と関西の違い

酉の市は、今では全国に広まっていますが、昔は、上記に何回もあるように浅草を中心にした関東のお祭りという性格が強くありました。では、関西はどうしたのでしょうか。先ほどの顔見世でも、関東と関西では<sup>ひとつき</sup>一月違ったように、関西は関東とは全く異なる風習があったのです。

これはもともと、関東は農業の土地が多くあったのに対して、関西は、特に京都は都で町の文化が存在し、農民の文化ではなかったために、宮中の歳時に合わせて様々なお祭りが町の中で行われていたからです。農業の文化を基にした新嘗祭などはありませんでしたが、しかし、そのお祭りの内容は、農業のお祭りや日本武尊のように武将のお祭りとは少し違う優雅なものが少なくありませんでした。

一方大阪は、古来より商業の都です。江戸時代には「天下の台所」といわれて、西日本か

ら瀬戸内海を使った海運の拠点として、様々な物資が集積される場所であったのです。そのために、古来より商売の神様、そして商売のお祭りが存在したのです。江戸時代になって、江戸の「酉の市」に近いものが伝わってきていますが、やはり、それ以前からあった商売のお祭りの方が強く残っています。

関西の商売の神様といえばやはり、「商売繁盛 笹もってこい」の掛け声で知られる恵比寿神社のお祭りではないでしょうか。

今宮戎神社や西宮戎神社がとくに有名です。この神社は、祭神は天照大御神、<sup>ことしろぬしのかみ</sup>事代主神、<sup>すきののおのみこと</sup>素盞鳴命、<sup>つくよみのみこと</sup>月読尊、<sup>わかひるめのみこと</sup>稚日女尊の5柱です。このうち事代主神が「えびすさま」、関西流にいえば商売繁盛の神様「えべっさん」として特に信仰を集めました。毎年1月9日から11日にかけて十日戎が行われます。

十日戎では、縁起物の「福笹」を持って「商売繁盛で笹もってこい」という掛け声口上をお囃子にしながら、お参りするようになっていました。この掛け声は、「笹を持って来れば商売繁昌させます」もしくは、「商売繁昌したら、また戻ってきなさい」の意味だといわれています。

福笹につける縁起飾りで、えびす様への願いや信仰を表します。縁起飾りは「小宝」または「吉兆」を表すとされています。また七夕などで笹に願い事をつけるように、笹の葉が神様に物を伝えるときの道具とされていました。笹の「さらさら」という音が神様の注意をひきつけるという意味があり、ちょうど柏手に似た意味合いがあるとされているのです。参拝客は、神社が授与する、野の幸・山の幸・海の幸を模した小宝、または小宝のついた福笹を購入し、神様からの「御神徳」を持ち帰ります。このことによって、神様の福を受けるように、商売繁盛になるということです。

このお祭りは豊臣秀吉が片桐且元に大阪の街を整備させたとき、正月三が日を過ぎたところ、商売が始まるそのタイミングで、商売人の「商いはじめ」を祝うお祭りを行うとして、制度化されたといわれています。豊臣秀吉は、このように非常にお祭り好きで、庶民出身のにぎやかな人物だったらしく、大阪の風物詩の天神祭なども、自分の時に整備しています。

このように、「ところ変われば品変わる」ではありませんが、お祭りもその方法も、場所が変わると様々に変わってきます。

関東流でも関西流でも良いと思いますが、この時期に新たなことを「事始め」というのは、なかなか風流なのかもしれません。